現代英米劇新作紹介

アーサー・ミラア（Arthur Miller）

『坩堝（つぼ）』（四幕）

The Crucibe

激しい労働が道徳律となり厳しいピューリタニズムが支配し一種の神政政治が行われているセーレムの町に一六九二年の春に起つた事件である。今このセーレムの町に魔女が住んで妖術を働かせているという噂さが拡がり町の人達はその噂さに脅えて牧師パリス（Parris）の許に駆けつけて来る。ところがその噂の出所は外ならぬパリス師の家庭である。彼の一人娘のベティ（Betty）が昨晩から異常な症状を表わし医者も手の施しようがない。彼は妻を失い家族といつてはベティと非常に美しい娘で人を伴わるのに天才的とも云うべき姪のアビゲイル（Abigail）と黒人の女中ティチューバ（Tituba）の四人である。昨夜ベティとアビゲイルとティチューバの三人と町の娘達十四・五人が当時悪魔が住んでいると信じられていた森の中で火を囲み踊つているのをパリスが発見した。その時ベティは気を失つた儘、時々窓から飛び出そうとしたり道路で羽ばたきをする様に手をふつたりするのである。又異常なのはベティだけでなくプトナム（putnum）の娘ルース（Ruth）も原因不明のまゝ昏々と眠り続けている。この二人は正しく魔女にとり憑かれたに相違ない。パリスはこの時四十才を半ば過ぎて今までの失意と迫害の生活を切り抜けて漸く町民の尊敬と安定した生活を獲得するに至つたのだが今若し娘のベティが魔女に憑かれたとするなら一切を再び失う事になると恐れて町に拡がつている噂さを否定するが遂には認めざるを得なくなる。

森の中では本当に遊戯のつもりで踊つていただけだとアビゲイルは始め伯父のパリスに説明するが事実はさうではない。彼女は女中としてジョン・プロクタア（John Proctor）の家で働いていたがジョンの妻のエリザベス（Elizabeth）の目をぬすんでジョンと彼女は肉体関係を結ぶに至つた。それをエリザベスに発見されて彼女はジョンの家を追い出されて今は再び伯父の家に寄宿している。しかし彼女はジョンを忘れる事が出来ず妻のエリザベスに嫉妬し彼女の死を願つている。そこで死人を呼び覚し魔術を心得ているティチューバを誘つて昨晩町の娘達と一諸に森の中でエリザベスの死を願つたのである。しかしこういつた事実が露れると彼女達は罰せられるので絶対に秘密にしておかねばならない。

一方ジョンは偽善を嫌う事甚だしく、それは却つて人々の反感をかう事もあり、彼にしても罪の意識は人よりも強いのだが教会の儀式や牧師のパリスを虚飾、偽善と排撃し日曜日にも教会に通はず今日も町の噂さを聞いてやつて来てパリスの偽善を痛撃するのである。他方昨晩からの異常な事件に関しての意見を求める為にパリスが招いていたヘール師（Rev. Hale）がやつて来る。彼は超自然の力、魔女に関して造詣が深く又当時の人々と同じ様に魔女の存在を信じていたがこのセーレムの町に来て、ベティに魔女が憑いているかどうかに関しては始め懐疑的な態度をとつていた。しかしアビゲイルやティチューバを

問い詰めてゆくうちに彼女達が自分達の罪を免れる為に悪魔や魔女にとり憑かれたと偽りの証言をするのを聞いて遂にはそれを信じてしまう。娘達にとりついた魔女は町のどの婦人であつたかと聞かれて彼女達は出鱈目に名前を挙げてゆく。神の御心に全てを委ねて魔女狩りなどと人の魂を弄ぶ様な事は止したが良いと主張するレベッカ（Rebecca）という老婦人の落ち着いた姿も現われるが、異常な興奮のうちに第一幕は終る。

第二幕は八日後のプロクタア家。セーレムの町は今魔女狩りでごつたがへしている。アビゲイルを始め町の娘達の前に次ぎ次ぎに召喚される婦人を見て娘達が叫び声をあげるか、ぶつたおれるかするとその婦人は魔女と見做され投獄され白状しないなら絞首刑に処せられるのである。アビゲイルは町では聖女の様に取り扱はれプロクタア家の女中メアリイ・ウオーレン(Mary Warren)もその一人で今朝から法廷に出ている。しかも魔女であると白状して絞首刑を免れた婦人もあるという。一方プロクタア夫妻の間はアビゲイルの事があつて以来妻は主人を信ずる事は出来ないしジョンも仲々自分を赦してくれない妻に我慢のならない思いが時々するのである。アビゲイルが魔女とは何の関係もない事を第一幕で彼女はジョンに仄かしたが証人もない事だし自分の過去の誤ちにふれるかも知れぬと恐れて、裁判所に行けと勧めるエリザベスに従はない。そこに女中のメアリーが帰つて来て今日裁判所でエリザベスの名前が魔女として挙げられたがその疑いも晴れたと言つて自分の作つた人形を彼女に贈る。エリザベスはこれはきつとアビゲイルが自分を追い出そうとする計画に外ならないから一切を説明しに裁判所に行く様にと重ねて勧めるのだがジョンはどうしても応じない。そこに突然ヘール師が尋ねてくる。プロクタア夫妻が熱心なクリスチヤンでないという噂さがあるので調べに来たのである。ジョンが教会に来る回数の少い理由を問ひ、モーゼの十戒を暗誦する様に要求するが彼は姦淫の罪を忘れてしまつている。そこにジョンの友人のジャイルス(Giles)や敬虔なレベッカの夫ナース（Nurse）がやつて来て二人の妻が魔女の疑いで逮捕されたと言う。あんな善良な女までがと驚くジョンにヘール師は悪魔が堕落する前は神様さへも悪魔を美しいと思つてらしたと答へる。しかし彼はジョン夫妻に対する疑いを一応といて帰ろうとするところに町の刑吏がエリザベスを逮捕しに来る。今日アビゲールが突然横腹を針でつきさされたがそれはエリザベスのせいだというので調べに来たのだが意外にもメアリーに貰つた人形の衣裳の下に針がつきゝつている。これを見てはヘール師も彼女を疑はざるを得ないし最早や如何なる抗弁も法廷以外では無駄である。泣く泣く彼女は刑吏にひかれてゆく。ヘール師はジョン達に今この世は確に狂つている様だ。この原因を探つてみようではないかと言い残して去つてゆく。事実を言えばアビゲイルに殺されるしジョンと彼女との関係も皆に露れるから黙つている方が良いというメアリイに俺の為に妻を死なせる訳にはゆかぬとジョンは絶叫する。

一ヶ月程後。舞台は暗闇の森である。ジョンが妻にかかつている疑いをといてくれる様にと頼むつもりでアビゲイルを呼び出したのだが彼女はその願いを聴き入れない。彼女は恰も巫女か狂信者の様で、自分を救世主と思いこみ自分の行為は世の偽善との闘いであると本気で信じこんでいる。この様な彼女に恐怖を感じながら彼は若し願いを聴き入れないならアビゲイルは実は大変な嘘はせもので人形の件も彼女の仕組んだ計画である事を法廷で公にするし、彼女との醜行も敢て発表して

も構はないと断言する。単なる強がりだと笑つていたアビゲイルも彼が本気であると知つて興奮と恐怖に駆られて走り去つてゆく。このシーンは始めなかつたのだが後ミラーの手で附け加えられたものである。

第三幕。セーレムの教会が今は仮の裁判所になつていて裁判が今行われているが舞台は法廷の控え室で扉越しに裁判の模様が聞えてくる。今朝レベッカは自白を遂にしなかつたので絞首刑を宣告され今はジャイルスの妻が裁判にかけられている。突然ジャイルスが妻の無罪の証拠があると叫び声を上げて控え室に連れ出される。その証拠を聴く為に裁判長のダンフォース（Danforth）やセーレムの町の判事、ヘール師等が入つて来る。ジャイルスの証拠を聴こうとしているところにジョンがメアリイを連れて入つて来るのをみて一人パリスが周章狼狽する。一方ジャイルスは魔女狩りが実はパリスや彼の友人のプトナムが勢力拡張の為に企んだものであると証言するが、その証人の迷惑を怖れてその名前を言わない。彼は法廷侮辱の罪を犯した事になる。その危険をみてジョンは敢てメアリイに勧めてアビゲイルや町の娘達の話は悉く偽りであると証言させるのである。彼は始めは妻を救うつもりであつたがその妻は姙娠中である事が判つて後一年は彼女の命は無事である。妻一人を救う為なら敢て証拠を呈出する必要もなく、若しその証拠が偽りであるなら彼も法廷侮辱の罪で罰せられるのだが彼は友人の為にも敢然と正義を主張する事を決心する。

さてアビゲイルは平然とメアリイと対決するが、突然体を震はせ神の御名を口にして神憑りの様子をみせる。憤慨したジョンはこの淫売婦と叫んで一切を告白し彼女は今復讐のつもりでこんな騒ぎを起しているのだと告げる。今度はエリザベスが招喚されジョンとアビゲイルの間に醜行があつたかどうか尋ねられるが勿論彼女は夫が自白したとは知らず彼の名誉を思つて否定する。一度も嘘を言つた事のない女の証言をとるという裁判長に今度はヘール師が彼女の言葉は妻たるものなら誰でも云うものであつてこれで一切を判断してはならぬ。大体アビゲイルは私にも度々嘘をついたと忠告する途端に彼女は再び神憑りの様子になつてメアリイを魔女よばわりし異常な振舞いをする。他の娘達もこれにつられメアリイが魔女の様に私達を虐めると虚空をにらんで叫び出すのでメアリイは恐怖に駆られてジョンこそ悪魔であつて今日した証言も夜毎に尋ねてくる彼に強迫された結果だと訴える。ジョンは投獄され、ヘール師はこの様な裁判には我慢が出来ぬと飛び出してゆく。

第四幕はその年の秋。自分が魔女であると自白をしないもの達の絞首刑が行われる前夜である。町は春からの魔女狩りで不安と混乱に充ち、荒れ果て、遂にはこの魔女狩りに疑問を持ち始めた人も出て来て暴動の気配さえ感じられる。皆が自白してくれれば皆の命を救う事も出来るし、魔女の噂さも証明されて町も落ち着くのであろうがジョンやレベッカやエリザベスは依然として自白せず無罪を主張する。アビゲイルはパリスの財産を持ち出して姿を消しその上パリスも勢力争いに魔女狩りの名をかりたのだろうと町の人達から脅迫される。今夜も彼等に自白させるか、刑の執行を延期して貰おうと最後の努力をはらつているが彼の願いはどちらも叶へられそうにない。ヘール師も囚人達に自白を勧め、死を要求する神はなく、生命こそ神の与へし賜物であつて、嘘をついても生命を完うした人間を神は慶し給うものだと説くのだがエリザベスはそれを悪魔の説であると排斥する。

ジョンに自白させる最後の方法として彼をエリザベスに会はせる事になる。彼はレベッ

カの様に、聖徒の様に神の為に、正義の為に従容と死ぬ事は出来ぬ。若し今死ぬとしても彼の場合はやはり伴わりであつて畜生共に嘘を言うのが嫌だからこそ意地をはつて自白をしなかつたのだが生命への執着は断ち切れない。彼にしてみればアビゲイルとの事で妻をあざむいた事が罪の意識となつていたのだが今まで偽りの自白をしなかつたのをやはり正直な証拠だとエリザベスに言われ、正直だという事を彼女だけでも認めてくれてアビゲイルとの事も赦してくれた上は偽りの自白をしてでも生きてゆこうと決心して自白はするが教会にはり出される自白書に署名する事を要求されると彼は又怒に駆られ俺の名前を名誉を汚したくないと署名するのを拒否する。ヘール師がその様な事はつまらぬ虚栄で間違つた自尊心だと説くのも聞き入れずに自白書を破り棄てて昂然と処刑されるのである。

この作品は有名なセーレム事件に取材した一種の歴史劇である。内容はあまりにも大芝居がかつた場面が多くキメの細かな優れた作品とは思へない。ただ迫力といおうか異常な空気を通して訴えて来るもの――それは他ならぬ作家自身の憤りである――がこの作品に力を与へ強烈な感銘を与えるのである。尚この作品は一九五三年一月ニューヨークのマーティン・ベック劇場で初演された。

（荒木　啓）

アーサー・ロウレンツ
(Arthur Laurents)

『郭公の鳴く頃』
The Time of the Cuckoo

第一幕第一場。ヴェニスにあるフイオリア荘（The Pensione Fioria）の庭園。夕陽がさしこんでいる。ここには今画家のエデイ（Eddie）とジューン（June）のイエーガー夫妻（Yaeger）、今は引退して海外旅行に出ているマックルヘニイ夫妻（Mcilhenny）と三十才位の美しく魅力的なレオーナ（Leona）が滞在している。彼女も普通のアメリカ人の旅行者の様に休暇を利用してヨーロッパにやつて来た。彼女も亦アメリカの母であるヨーロッパ大陸に多くのものを求めて来たのであろうが郷に入つて郷に従う事の出来ぬ女である。イエーガー、マックルヘニイ両夫妻とフイオリアが食事をとりに外に出掛けてゆくのを見送つてただ一人で淋しく食事をとる。

第二場。翌日昼過ぎ。幕が上るとイエーガー夫妻がデッキチェアに休んでいる。エデイは明らかに二日酔いで昨晩二人の間に何かいざこざが起つたらしい。レオーナは昨日ルナト（Renato）の店でヴェネチア風のゴブレットを買つたが今日その番をルナトに探して貰つて求めて来た。彼女は何故かルナトの話に触れたくない様だ。ジューンにそのゴブレットを見せている時にルナトが庭に入つて来るがジューンの姿をみて姿を隠す。ジューンが字の中に入るのをねらつたかの様に彼は再び姿を表はしレオーナを驚かせる。彼は四十才ばかりの女にも男にも好かれる男である。ヴェシーチア風のゴブレットには同じ模様のものが多いのでツガイを熊々探し求める必要はないのだがもう一度あなたに会いたい為に探してあげましようと言つたのだと云う。彼の露骨な態度に始めは憤り呆れ疑つていた彼女もこの世界は美しい、大いに楽しむべきだという彼の言葉にひかれて夕方会う約束をする。

第三場。その日遅く黄昏の舞台に一人の少年がいてレオーナに向つてルナトが少し遅れるからと伝へる。彼と話しをしているうちにその少年は実はルナトの息子で彼には妻子が

いる事が判る。憤つた彼女はもう来ない様にルナトに伝へてくれと少年を帰らせる。あてもなく庭をさまよう彼女に女中がイエーガー夫妻が喧嘩をしたと伝へる。一人出て来たジューンは私の為に一切が駄目になつてしまうのと云う。彼女は以前ある音楽家と結婚したのだが詰らぬ事に腹をたててその夫は彼女を捨てたという。レオーナは驚くが映画をみると気が晴れるというジューンを見送りがてら外に出てゆく。まもなく一人帰つて来た彼女はエディとフィオリアがゴンドラの客引きの少年のマウロ（Mauro）に案内されて二人で庭を出てゆくのを見て驚きマウロを責めるがルナトが来て仲に入り彼を帰らせる。ヴェニスの一切に失望したという彼女にルナトは他の人を不貞だといつて責めるのはいらざる御節介で正しいとか間違つている等と云う事は出来ない。私に妻子があるといつたつてそれは問題ではなく、大事なのなあなたと私だけなのだ。このヴェニスを人生を楽しめば良いのだとルナトは説明する。私は随分違つた世界から来たのねとつぶやきながらもルナトに心惹かれるのを抑へる事が出来ない。

第二幕第一場。翌日の夕方。レオーナは昨日ルナトに頼んで随分良い割合で金を両替して貰つたとフィオリアに話しをしている。今日もルナトが尋ねて来る事になつているのだが約束の時間を過ぎているのにまだ表われない。スーツケースだけでアメリカから来る事が出来たらどんなに良い事だろうと話しかけるレオーナにそう出来なかつたから私達イタリヤ人を理解出来ないのよとフィオリアは答へる。そして又彼女は何時までも夢の世界に憧れたりするのを止めてありのままの世界を見つめる様にしたらとレオーナに勧めるのだが、彼女は完全なもの、理想を信じて求める事を止めようとしない。今日はイエーガー夫妻が仲直りをして二人の幸福そうな姿をレオーナが羨しそうに眺めている。ルナトがまだ表われないで興奮し焦々して涙をながしかけているところにルナトが馳けつけ、昨日レオーナが頼んでいたガーネットの首飾りを探していたので遅くなつたとその首飾を彼女に贈る。すつかり気嫌を直した彼女の幸福そうな仕草。

第二場。今日はレオーナが主人となつてカクテル・パーティが開かれている。幸福の絶頂にあるレオーナ。ところがそこにルナトの息子が出て来た首飾りの金の催促がうるさいから早く払つてくれと父親に頼む。それを聞いてレオーナは恥かしさに堪えながら息子に金を渡す。暫くして又息子が帰つて来てこれは贋金だと云う。ルナトに両替して貰つた金が贋金なのだ。一生懸命に弁明するルナトに首飾りをつつかへして彼を罵倒して追い帰してしまう。逆上した彼女は酔も手伝つてエディとフィオリアの事をジューンに遠まわしに告げる。私は傷つけられた仕返へしに皆を傷つけてやると叫ぶ彼女にフィオリアも怒つて夢を破られたのを傷つけられたと人の故にするのは云い過ぎだ。夢や理想は過去にも現在にも未来にも存在しないと云い捨てて出てゆく。一人後片附けをしているレオーナは早くアメリカに帰りたい、ここでは一切が間違つている。どうしてルナトは私を愛する事が出来なかつたのか。私を愛するとだけでも言つてくれなかつたのかと泣き出す。

第三場。翌朝早くエディとフィオリアとルナトが庭にいる。ルナトはじつとしていられなくて席を立つ間にフィオリアに僕はやつぱり妻のところに帰つてゆこうというエディに人間というものはこれが理想的な生活だと思つて生きてゆかねばならないのでつらい事もそれをその儘受けとつて、それを少しでも良い様に変えようと思つて生きて行く他はない

のねと彼女も淋しく答へる。起きて来たジューンは彼のパトロンの公爵夫人がフロレンスに移るので一緒にここを発とうとエディに奬める。イエーガー夫妻もこの荘を去るであろう。レオーナも始めはルナトに辛く当つていたが、ルナトに対する愛情を忘れ去る事も出来ない。多分これが彼女の最初のそして最後のロマンスかも知れぬ。別れる時に彼女の手にした彼の接吻をただ一つの土産として彼女も亦アメリカに帰つてゆくのであろう。

この筋からも判るであろうがこの作はヘンリー・ジェイムスの画く世界に酷似している。ヨーロッパは確にアメリカの母であつてもやはりアメリカ人はここに安住の地を見出す事は出来ない。一人のアメリカ人が違つた世界との接触から起す色々の問題、新世界と旧世界は結局異質のものでしかないと知つた一人のアメリカ人を分析してみせてくれるのである。勿論この作品の主人公はジェイムスのそれとは違つて上流社会の人間ではない。第二次大戦後多くのアメリカ人がイタリヤにフランスに英国に旅行したが彼女もその多くのアメリカ人の一人に過ぎぬ。だからこそ観客に訴へる事が強いに違いない。それに彼女は「慾望という名の電車」のブランシュでもある。人生にロマンスを求めロマンスにしか生きてゆけない女であり、又アメリカ人である彼女は清教徒的抑制を捨てる事もルナトやフィオリアの主張する現実的な割り切つた態度も納得出来ない。彼女の問題は決して彼女一人の問題ではなく、多くのアメリカ人の抱く問題なのでもあろう。尚この作品は一九五一年に上演される手筈になつていたがプロデューサーのホワイトヘッドとワルター・フレッドが主役のレオーナの役は「愛しのシバよ帰れ」でオスカー賞を得たシャーリ・ブース以外にないという意見で彼女の体の空くのを待つていた為に遅れて一九五二年十月ニューヨークのエンパイア劇場で上演された。

（荒木　啓）

ユージン・オニール
Eugene O'Neil
『敗残の月』
A Moon For The Misbegotten

この作品は、今までに発表されているものの内、オニールの晩年の作品で、一九四三年に完成されている。一九四七年しばらく地方興行を行つたきり、未だブロードウェイでは上演されていない。登場人物は五人。四幕。一九二三年の初秋。正午頃より翌日の早朝まで。所はコネティカットの農家。

四幕を通じての舞台は、アイルランド移民農夫の、とつてつけた様な貧弱な荒れて寒々とした家屋の模様を表はし、全体が如何にも零細な小作百姓の生活を示している。

第一幕（正午近く）

女主人公のジョジー Josie が出てくる。彼女は二十八才、未婚で、畸形に近い大柄の女で丈は五フィート十一インチもあり、目方は百八十ポンドに近い。その肩は巾広く、豊かな胸は大きながつしりした乳房で深々と厚く、腰部は広いが、更に巨大な臀部と太ももとの対照によつて、むしろほつそりとさえ見える。長くなめらかなその腕は、しかし大の男二人分位の怪力をひそめている。だが、彼女の何処を探しても男のような所はなく、その長い唇、小さな鼻、豊かな黒い髪、暗青の瞳、日にやけたきれいな肌、真白い歯をみせる微笑――これらすべては、女性の深い魅力をたたえている。

そこへ、弟のマイク Mike Hogan がそわそわと現われる。彼は父親の酷使に耐えかねて、兄達の所へ仕事を見つけに、ジョジーの

助けをかりて、この家を逃げ出そうとするのである。カソリック教徒である事をはなにかける偽善のいやな男（A New England Irish Catholic Puritan, grade B）である。別れに際してジョジーは盗んでおいた父の財布を手渡すが、彼はしかつめらしく、姉の素行を非難し、"Virtue"を説く。しかし彼女は彼から何を云われようと意に介しないが、「ジム・タイロンを財産目あてにひつかけようとしている。」とののしられて、初めて立腹する。彼女はタイロン Jim Tyrone を愛しているのだ。

其処へ、父のホーガン Phil Hogan が出てくる。（マイクはあわてて、姿を消す。）ホーガンは樽のようにづんぐりした老人で、移民以来の生活の圧迫と長年の労苦によつて、陽気なアイルランド気質の中にも、抜目のない小賢しさと、金のためには、何事をもいとわぬといつた厚顔さとが具わつて、独特の性格が出来上つている。

彼はたつた一人残つていた息子にさえも逃げられて憤るが、やがて「厄介払いだ。」とかえつて喜ぶ。娘ジョジーの中に、自分にとつて唯一の女性であつた亡妻の面影を見出している彼は、父娘二人がこれから水入らずにやつてゆけるのを喜ぶのである。

ここで再び、彼等の話題にジム・タイロンがのぼる。ジョジーのタイロンに対する気持を知つているホーガンは、これをうまく利用して娘を餌にして地主タイロンの気嫌をとり、彼の財産をもせしめようと謀つている。それで、盛んに、タイロンが彼女に意のある事をほのめかし、一緒になるようにとたきつけ、色々の手くだを教唆するのであるが、表面、はすつぱを粧いつつも内心処女の清浄さとはにかみの気持を持つジョジーは、伸々肯じようとしない。

ここで、ジム・タイロンが現れる。彼は四十才余り。放蕩からきた不健康と、曲つたわし鼻を持ち、絶えず冷笑を浮かべたようなその顔はメフィストフェレスを思はせる。然し、無邪気にほほ笑む時は、感傷的でロマンチックな若き日の魅力を呼び起すのである。ヴォードヴィルのしやれ者のかつこうをして、今日も又、二日酔の態に見うけられる。

ジョジーは彼に対しても努めてあばずれ女の様に振舞うが、彼はジョジーを Virgin だと信じ、その美しい乳房に肉感的な讃仰を捧げる。

其処へ、隣地に住む百満長者のハーダー T. Stedman Harder が訪ねてくる。

ハーダーは成金石油業者の息子で四十に近いが、親ゆづりの財産で苦労も知らず、冒険心もなく、人生の慾望もないといつた男。

彼は、自分の地所の池の垣根がホーガンの飼豚に荒されたといつて抗議にきたのであるが逆に悪罵を浴せられて、ほうほうの態で逃げ去つて了う。

この様子を見て、タイロンは大笑いし乍ら、入つていた室内から出てくる。そして彼はハーダーがホーガンの借りている小作地に高値をつけて買いとろうとして彼との話しをすすめている事を話すが、彼を信じているジョジーは、これをあくまで冗談だとみなしている。さて、話しがホーガンの未払の借地料に及んだ時、かねて親子の話し合い通り、ジョジーは彼の気分を転換してその場をうまくつくろうため、（実は彼女はそれを内心嬉しく思つているのだが）「一夜共に月を楽しもう」とのタイロンの申し出を承諾する。然し一面で、タイロンの放逸と酒癖をたしなめるジョジーの態度には、異常な程の真剣な念いがこもつている。タイロンは帰つてゆく。

第二幕（夜十一時過ぎ）

着かざつたジョジーは焦々し乍ら憂はしげ

にタイロンを待つている。だが彼は来ない。
その中に、父ホーガンが酒場から酔つぱらつて帰つてくる。そしてやがて、悲しげにもつれる舌で、タイロンから借りている小作地をタイロンが事もあろうに、常日頃父娘の反目しているハーダーに高く売り出そうとしていると語る。タイロンの売買承認サインは翌朝行はれると言うのだ。そうなれば、ホーガン達は、その土地から追い出されて、生活は破滅する。それを聞いて、タイロンを信じ且つ愛していたジョジーは「裏切られた」と憤り父の云うままに、本当に彼をおびき寄せ、トリックにかけて、ジョジーと寝ているところをとりおさえ、「暴露する」とおどかしてサインをとりやめさせるという計略をつくる。

丁度、そこへ、タイロンがやつて来る。ホーガンはあわてて姿を消し、ジョジーは彼を迎へ入れる。彼女はタイロンに対する情愛の念と、彼に裏切られて生じた憤怒の復讐との念が奇妙に混じ合い相克して、烈しく悩みながら、彼に酒をすすめる。しかしジョジーを真実愛しているタイロンは、彼女のこういつた態度が気に入らず、もつと真面目にもてなしてほしいのである。又彼はジョジーが処女である事を疑はず、こうしたところから酔つても仲々彼女になれなれしく手出ししようとはしない。タイロンに対するジョジーの愛と憎しみの入りまじつた感情はこの為に一層深刻になるのである。

第三幕（引きつづき）

やがて更に酔のまわつたタイロンは、同夜酒場で、ホーガンに語つた事を話し、「小作地をハーダーに売り渡すと冗談を云つてやつたよ。一度約束した事は、破つたりすることはないのに……」と云つて笑う。始めてジョジーは彼の本当の気持を知つて、彼を固く抱きしめる。彼はジョジーの胸にもたれてねむる。母の様な彼女の胸の中に幼な児の様にうづくまつて眠つているタイロンの顔は、青白い月の光を浴びて宛も死人のマスクの様である。

Josie. ".....Jim! Don't look like that!"

Tyrone. (Opens his eyes——Vaguely) "Like What?"

Josie. (Quickly) "It's the moonlight. It makes you look so pale, and with your eyes closed——

Tyrone. (Simply) "You mean I looked dead?"

Josie. "No! As if you'd fallen asleep."

それからタイロンは、若い日の自分の物語りを始める。そして、話しは彼の母の死へと移る。彼等母子は深く愛し合つていた。その母が急病で死ぬことがわかつた時に、彼は余りの苦痛に耐えかねて、それをアルコールでごま化そうとした。こうして酔つぱらつた彼を死の瞬前に見た母は、息子の飲酒に耐えられなかつたのであろう。宛も死を喜び迎へる様に目を永久に閉じていつたのである。死体を運ぶ列車の中で殆ど気も狂はんばかりだつた彼は、女に浸り込むことによつてまぎらわした。こうして、今の彼の生活は始まつたのだ。と。こう語り終つて彼は母の様な彼女の愛撫に身をまかせて涕泣する。

第四幕（同じ場所。暁。ジョジーとタイロン）

二人の姿は、青白い暁の光を浴びて奇妙な位悲劇的な、一種の絵画を形造つている。悲しみに満ちた大きな女が、憔悴し切つた酔つぱらいの中年男をまるで自分の病児でもあるかのように抱きしめているのである。其処へ父ホーガンがしのびよる様に出てくる。しか

し、トリックだつたと知らされて激怒したジョジーから散々やりこめられて、こそこそと家の中へ入いる。ジョジーは事が計画通りに運ばなかつたことを喜ぶ。

そして、タイロンが茫然と目を覚した時、二日酔の中にも彼女を愛している彼の気持だけは確かであることを知つて喜ぶのである。一方、タイロンは、昨夜酔つぱらつたあげくにジョジーの処女を奪はなかつたかを心配するが、彼女から聞いて安堵する。そして彼は、ジョジーの愛の中に浸つて始めて、母の死以来かつて味はい得なかつた心の平和と恕しの感情をとり戻すのである。

Tyrone. "It's hard to describe how I feel.

It's a new one on me. Sort of at peace with myself and this lousy life ——as if all my sins had been forgiven——

暁方の光は、次第に強く明るくなる。タイロンは、別れを告げて去つてゆく。

其処へ、ホーガンが出てくる。彼は次の様に彼の真意を語る。

「わしは、お前等二人がお互いに〃ふりをする〃ことを止めて、ほれ合つとる事を素直にみとめ合い、幸わせに結び合へる様にと、こんな下らぬトリックをしくんだものじや。むろん、わしは初めから、あいつがお前と結婚もせぬ前に、お前と一緒に寝たりしない事も知つておつた。わしがあいつの財産の事を考へたとしても、これはみな、お前がわしみたいな者の奴隷にいつまでもならずに、早く楽に暮してゆけることを念じておつたからじや。」

父は娘を手放したくないと思いながらも、やはりその幸福を念じていたのである。

しかし、ジョジーは、このような父の言葉は、耳に入らぬ様子で、次第に小さくなつてゆくタイロンのうしろ姿を、じつと見送る。

Josie. (Her face sad, tender and pitying ——gently)

"May you have your wish and die in your sleep soon, Jim, darling.

May you rest forever in forgiveness and peace. (She turns slowly and goes into the house.)

幕。

（近田小一）

ウイリアム・サロイヤン William Saroyan

『無辜の殺戮』 *The Slaughter of the Innocents*

サロイヤンの文学的経歴は、当初から劇作家として出発したのではなく散文作家としてであつた。一九三四年に発表した *The Daring Young Man On the Trapeze* を始め数多い短篇小説 *The Human Comedy*, *The Adventure of Wesley Jackson* などの長篇小説を彼は戯曲の他に書いている。極めて向日的な、人間の善意、魂、良心といつたものに対するオプティミスティックなまでに強い信念を根底に、日常茶飯の事件、人物、個人的経験などを流暢なタッチで描き、美しいポエジイ、ほのぼのとしたペーソスを生み出している。戯曲の第一作は Robert Burns の詩の一つと同じ題の *My Heart's in the High Lands* (1939) である。全体の雰囲気は詩的でファンタスティックであるが、善良で貧しい人間が常に苦しまねばならぬこの社会への真そつな彼の怒りが感じられる。第二作は *The Time of Your Life* (1939)。如何にも彼にふさわしい作品で、桑港の波止場近くの酒場を舞台に、そこに集

まる多様な市井の人物同士の、心情の交流が、一種の調和を醸し出す幻想風な作である。これには一九四〇年に Pulitzer Prize と Critic Circle Award が与へられた。以後 *Love's Old Sweet Song, The Beautiful People, Across the Boad on Tomorrow Morning, Talking to You, Get Away Old Man, Some Ego's House, Don't Go Away Mad,* などを次々と発表した。その新鮮でオリジナルな作風で彼の名声は高くあつたし、又現在でも高くはあるが、批評家の間では当初に示されたほどの賞讃は聴かれない。ある批評は、*Get Away Old Mad* について "Both a muddle and a bore…" ときめつけてゐるが、これは彼が何れ受ねばならなかつた非難である。感性と知性の充分な融合が成就されず、漠とした雰気囲は生み出しても訴へる力を欠いている場合が多いのである。*The Slaughter of the Innocents* は一九五二年十一月号の *Theatre Arts* に掲載された。

サロイヤンは標題の示す如き悪が種々の名のもとに正当化され、人間性を脅かしている現代の状況を一種の寓話的に表現しようとしたようである。作品に関する批評はここでの目的ではないので省くが、彼の作が自身も言う通り、常に time の所産であり、それがここでは従来より遙かに積極的な態度と広いテーマを盛りあげている点で彼のものとしては注目すべきであろう。幕を追うて梗概を述べてみたい。時も場所も特に示されていない。

二幕五場。

一幕一場

舞台はアーチイ Archie Crookshank の経営する飲食店、倉庫の高い煉瓦塀に囲まれた駐車場が隣合つてある。彼の店はこの朝「共和国」政府によつて粛清裁判所に指定されたところで、幕が開くとアーチイが政府からの通達書類を読んでいる。そこへ一人の女が入つて来てウキスキイを註文するが彼は事情を言い、更に彼女が政府の敵性人リストにのせられているのを示し、早く立去ることを勧める。だが彼女ローズ Rose は以前からの馴染だ。彼女は日々、目前に行はれる殺りく、自殺　死の恐怖にひしがれている。この店だけが心の憩の場所で追はれれば行く処がないと訴へる。さうしている処へ裁判官や執行官、検事などが現はれる。彼等は民衆から政府によつて選ばれた人達である。政府直属の法廷管理官は、居合せたローズをアーチイの娘と思い込み、民衆の代表として証人たることを命じる。アーチイは彼の誤認を正そうとしない。かくして裁判が始まる。第一の被告は職業紹介所の係員を「暗殺」せんと企図した疑いで起訴された。が、職を得ようと三ヶ月通いつめた揚句係員のすげない拒否に会い、かつとしてなぐりつけたにすぎないのである。しかし有罪と判決され刑場にあてられた駐車場で銃殺される。以後銃殺の行はれる毎に「人民の為の、共和国の護りの兵、万歳！」と先導の声、それに合せて「民衆のために！」とコーラスが聞かれる。ここで管理官は、法廷は朝十時から五時まで開廷、五時から夜半一時まではアーチイの営業を許可する旨宣告する。

一幕二場。

五時二分前、裁判が続行されている。何人目かの被告が呼び出された。アーチイは、もう時間がないと口出しするが、裁判は二分で見事にけりがついて被告ジョセフは死刑。彼の起訴理由は「過度の飲酒で自殺を図つた」ためであつた。裁判官達の出て行つた後アーチイとローズは言いようのない悲しみと怒りでウキスキイを呷る。被告たちは理由にならぬ理由で引き出され例外なく人民の名に於て

殺されて行つた。ローズは彼等の事を考へると生きているのが恥ずべき事のように思はれると言う。しかし一方では自分は父を知らないが、アーチイが自分を娘と言つてくれた事に感謝し、この家のために本当の娘のように働くと言う。アーチイも身の上話をして二人の心は次第に結ばれてゆく。だがアーチイが、裁判官達を獣と罵しり、彼等は殺人の責を負い又、人間として政府の殺人命令を拒否すべきだと怒るのに対してローズは同調出来ない。責任をとり、或いは命令を拒否すべきは我々自身ではなかつたか。アーチイは、彼自身すでに彼等に殺人の場を提供していることを指摘されると、自分は力弱い市民でどうすることも出来ないからだと弁解する。しかしローズは helpless なのは彼だけでなくすべての人間がさそうなのだと言う。自分が責められているように感じるアーチイは、では他のぎせいになつて自分が処刑されるのか、又は裁判官を殺すべきか、どうすればよいのかと尋ねる。ローズは彼等を殺したとて裁判は止め得ない。結果は「我々」が「我々」を告発し、処刑することに終るだろうと言う。アーチイは「彼等」が告発し「我々」を殺すのだろうと聞きとがめるが、ローズは「彼等」も「我々」もなく、すべて人間の意味に於て我々同志告発し、殺し合つているのだと答へる。アーチイは彼女の気持が判らない。その中ローズは駐車場の刑場に、昼間殺された筈のジョセフがまだ生きているのをみつけ、しぶるアーチイを説いて助け入れる。丁度そこへアーチイの古い友達のメイ May Foley という女が来合はせて、ともに介抱する。しかし男は甲斐なく死ぬ。

一幕三場。

午前一時十分前、アーチイ、メイ、ローズの三人が話している。メイは長らく遠くに居たが何時も酒ばかり飲んでいたとか、若い頃別れた子供達に逢つたが彼等は何故か幸福そうじやなかつた、などと語る。アーチイとローズは交々、この店が法廷に指定されたこと、今日処刑された中にメイに似た女が居り、その女は万引女で、三つの時死んだ自分の子供をまだ生きているように思い、法廷でそればかり心配していた、全く酒飲みだつたと語る。その中に一時をすぎ、アーチイは二人に出てゆくように言う。ローズは妙に思うが仕方なく去る。その後鍵を下した筈の扉が開かれて先程アーチイの話した万引女が現はれ、再び自分の子はどうしているだろうと問う。彼は怖れて子供は死んだと言うが女は承知せず、あれこれと心配しつつもアーチイの出す酒を飲んで慰められて出てゆく。調べると鍵はもとのままだつた。入れ代りにローズが入つて来て、何処にも一人では居れない。ここで良い家庭を作りたいと訴へる。アーチイも今は彼女を父親のように抱いてやり、世界中寄る辺なき死者と生者に満ちている怖ろしさを語り合う。

二幕一場。

翌朝十時前、ローズはあるだけの材料で豆スープを処刑者のために作つてやつた。粗末なスープでも、平和な一家のまといの中では大きな愉楽となる。そんな御馳走は今は希むべくもない。アーチイとローズがそんな話をしているところへメイが来る。彼女は二人に向つてアーチイと同じような経験を話す。昨夜、寝ているところへ若い男がやつて来たが、それは昨夜ここで死んだ男ジョセフによく似ていた。彼はベッドの側にひざまずき、泣き、そして出て行つた。後をみると鍵はもとのままかかつていたと語る。やがて裁判が再開され、同席していたメイは、間違つてアーチイの妻として扱はれることになる。演劇批評家、贋金作り、貧しい詩人、老婦人などが、

裁判が人民の利益擁護のためのものであることを証拠だてんとする意図から、幸福にも釈放された批評家を除いて、次々と「人民の敵」として殺されてゆく。そして遂にジョンという三才の幼児が、共和国兵士たる父（彼は衛兵として法廷に居る）及び婦人兵たる母に対して「公然と憎悪と軽べつを示した」かどで引き出されるに至り、アーチイは保身欲をすてて憤然と裁判官を罵しる。法廷は混乱するが、そこへメイが買物から帰つて来て、争いの真中にいる幼児を発見し、あつ気にとられる裁判官を尻目にあやしながら二階へ連れて上る。この時法廷管理官が政府からの新しい指令をもたらす。それは裁判官以下衛兵まで六人の法廷側と、これから裁かる予定の六人の被告が順次その位置を交代することを命じる奇妙なものであつた。裁判官は第一番目の被告と立場を代へ、しかしその被告の起訴理由がそのまま適用されて裁かれるのである。以下執行官、検事皆同様である。かくして旧裁判官は、先ず共和国を呪い、その業績をやゆした事由を論告される。だが新検事は、被告を処刑しても事態はよくならぬし、又共和国は如何なる個人をも罰し得ないと信ずる故に、すべてを被告自身の判断に訴へると言う。新辯護人は、被告は多量殺人の罪のため当然有罪だと叫ぶ。被告自身は、当然自分は殺さるべきである。何故なら、本来ならばすでに新裁判官たちを殺していたであろうから、と言う。最後に新裁判官は、被告たちの罪は外的な徴罰で消えるものではない、彼等は生きつづける事によつて罪をあがなうことを要求する。この時再び管理官は休憩の後、法廷側と被告側は入れ変り、各々旧の位置に復することを命じる。

二幕二場。

もとの被告六人の中、五人まで処刑され、最後の一人も、「さきの『実験裁判』は民衆の叡智を証したものだとうそぶく裁判官によつて殺されてしまう。そして二階に居る幼児ジョンを連行して来るように命じられたとき、父親である衛兵は遂に裁判官に銃を向け、ジョンを無罪にすることを迫る。これに呼応してアーチイは裁判官をなぐり倒し、気絶させてしまう。彼等は多くの無実の人間の殺されるのに何の抗議もしなかつた。彼等も同じ殺人者の一味だつたのだ。しかし今やプロテストを始めた。と同時に逃れられぬ運命を背負つてしまつた。何れすべてが殺されるだろう。やがてメイがジョンを連れて降りて来て父親にわたし、ジョンは、今は二人の親を憎んではいないと告げる。父親は子供が家に帰りたいとせがむのだが、この状況では外へ出てゆきにくい。しかしメイの母親としての自然の言葉で、子供を連れて帰ることをすすめられ、二人して去つてゆく。メイの楽しげな様子。　幕。

サロイヤンはこの作品について「この芝居の出来事はどこで起るのかという当然の疑問にはそれは我々の眠つたり、考えたりして居る間に、程度の差こそあれ、我が国を含めて世界の至るところに起るものだと答へる」と言つているが、ここに行われている悪は要するに、あるメカニズムの歯車が、人間の個人性を非情に圧殺してしまう姿である。戦争中、敵味方を問はず行はれた数々の凄惨な事実の何れでもある。そして現在も、信じられないように、奇怪で酷薄な事実をいくつも目前に見ているのである。メカニズムは意志を持つが、その中の個人は意志を失い、自己の進む方向さへ意識しない。のみならず、自己をこの怪物に奉仕せしめ、それを至上のものと考へるに至る。同時にメカニズムは自身を正当化するために個人を尊重するかのような擬態をとる。人間性、自由、生命を守るために

我々はこの非人間的暴力に対抗しなくてはならないし、又根源的にはその暴力の存在に責任を有している。では如何に行動すべきか、それは力による抗争でもなく、イズムも又行動の原動力たり得ない。結局、自からなる良心であり、人間の愛情のみが歪んだ社会の規範となり得る。彼の信念はあくまでもこのようなものであろう。作品自体にはやはり彼独特のムードが横溢している。

（宇喜田敬介）

テレンス・ラティガン作

Terence Rattigan

『ウインズロー・ボーイ』

Winslow Boy

嘗つて、英国のオズボーン海軍兵学校の一生徒が窃盗の嫌疑をかけられて退校させられ、その問題が議会に迄取り上げられて英国に喧々囂々の騒ぎを惹き起し、遂に無罪の宣告を受けた事件があつた、この作品はこの事件に取材したものである。戯曲は四幕に分かれ第一章は第一次大戦の始まる四、五年前のある六月の日曜日の朝ロンドンの近くのウインズロウ家に始まる。父親のアーサー、母親のグレース、娘のカサリーン、それにディッキーとロニィの二人の息子がいる。その他に下宿人のデスマンドと女中のヴァイオレットが一緒に住んでいる。ディッキーはオックスフォード大学に在学中で、今日休暇で帰宅しているが、ロニィはオズボーン海軍兵学校に行つていて、休暇迄にはまだ二日程あつて、帰省していない。ところが帰つて来る筈のないロニイが突然帰つて来た、兵学校で僅か五シリングの為替の窃盗の嫌疑で退学になつたと云うのだ。昔気質で厳格な父親に知らせるとどんなに彼が憤るかも知れない、と云う心配から、母親と姉と兄の三人は彼を二階にかくまう。一方カサリーンは美しい男勝りの気象の女で、女性解放運動に従事しているが、今日ジョンとの婚約の発表が行はれることになつている。ロニイが帰つて来ていることは夢知らぬ父親のアーサーは娘の婚約を祝して乾盃する。其処で、女中のヴァイオレットが、ロニイの帰つて来ていることを皆知つていることだと思つて彼の為の盃を持つて来ることから、アーサーに秘密がばれてしまう、ひどい事をしないで欲しいと母親や他の人達を部屋からしりぞけてロニイと二人だけになつた父親のアーサーは俺とお前の間に秘密があつてはならぬと前置して、本当の事を云う様に、ロニイに詰め寄る。ロニイは断固として無罪を主張する。大体父親は長男のディッキーよりもロニイの方を信じているのだがロニイの返事は父親の信頼を裏切るものではなかつた。彼はロニイを寝室へやつてオズボーン兵学校へ電話をかける。

それから九ヶ月を経て第二幕が始まる。訴訟は難航を極めている。ウインズロウ事件として英国の世論はこの事件に大きな関心を示している。新聞には投書が載り、人間の個人の自由を守れと激励するもの、又反対に現在の様に国家存亡の危機に、かかる些細事に時間を費すことはもつての外だと非難する声、兎もあれ英国中に大きなセンセイションをまき起している。一方ウインズロウ家ではカサリーンとジョンの結婚は幾度も延期され、訴訟で金が要るのでディッキーもオックスフォードを中退する様にと父親に頼まれて、納得せざるを得ない。新聞記者はつめかけて、家庭の静けさはこの家から追放された感じである。それと難航する訴訟が父親の心の中に暗い影をなげている。だがもう一度試みて見ようと、英国一の辯護士と評判の高いロバート・モートン卿に辯護を依頼する。が、卿は権力の味方で已の立身出世のみを念頭に置いて

いるから、この様な事件には首をつつ込まないだろう、とカサリーンは反対する。幕切れ近く、卿がやつて来て先ずロニイに尋問する。ロニイの答は支離滅裂で到底卿はこの事件を引受けまいと思うのに意外にも、ロニイの無実が判つたから、この事件を引受けようと云う。

第三幕は同じく九ケ月たつた夕方。事件は未だ落着そうにもない。仲々正式の裁判にのらないのだ。而もこの事件の張本人のロニイは今ではイートン校に転校して、楽しく過し彼自身この事件には父親程力を入れていないし、も早自分の事件だと云う事を忘れてしまつた様でさへある。十五才の少年にとつては止むを得ないことであろう、そうした彼を父親が叱り、それを又、今度は母親が非難する。幸福な家庭、平和で静かで地味ではあるが恥かしくない生活、そして私達一家の将来がこの一年間にすつかり失はれてしまつた、この事件は大事ではあるけれども、そんなことで失つたものをとり戻す事は出来ないのですよ、と泣き崩れる。其処へ裁判所からカサリーンと卿とが帰つて来る。もう一ふんばりしてみようと張り切る二人に、グレースの言葉と、ジョンの父親からの手紙——この事件には全然反対なのでこの訴訟を引き下げないなら、息子とカサリーンとの結婚は認めないと云う——を読んだ父親は、もう止めた方がよいのではないかと弱音をはく、其処へジョンが尋ねて来る。ジョンにして見れば彼の父親からの経済的援助がなければ生活も出来ないし、この事件に関して、カサリーンについての色んな話も聞くので、彼女に事件から手を引いて貰いたいと望んでいる。そこへ電話がかかつて来て、愈々訴訟が軌道に乗り出したが、やはり続けるかどうか決定を求める。アーサーは、その決定権は既に娘にあるからと返事を辞る。正義は守られねばならぬ、とのカサリーンの返事に、ジョンは憤つて家を飛び出して行くのである。

第四幕では遂に議会に迄この問題は発展して、愈々大詰の感がある。アーサーも精神的肉体的緊張からすつかり老い込んでしまつている。一体何が彼等を動かしているのか、英国中はやはりこの事件にかかり切りで、新聞記者が詰め寄せる。下宿人のデスマンドが、カサリーンに結婚を申込む場面などがあつて遂にこの事件は無罪の判決で終熄を告げるのである。勝利を得たかも知れないが、一体どれだけのものを失つたことか。私はジャスティよりもライトを求めたと卿は彼女に告げる。彼にしても公然と政府に反対して立身出世のためには多くのものを失つたに違いない。彼女はこれからも女子参政権獲得の為に働いて行くであろう。議場で会いましようと卿と彼女は約束して別れて行く。

この作品は一九四六年の作で、少々古いけれども、彼の代表作の一つと考へられるので、ここにその大略を紹介することにした、これは又四六年のベスト・プレイとして Ellen Terry Award と、海外ベスト・プレイとしてアメリカの New York Critic's Award を得、又、映画にもなつた。

之がかかれている内容が極めて英国的であり、そこに出て来る人物も英国人気質の見本であり、地味で、さして興奮的なシーンのない戯曲であるが、而し最後迄緊張感を失はずだれずに、而も問題を正面から、正攻法でおして行く力に驚くのである。エリオット、フライ、等の詩劇を、英国劇壇の一潮流と見做すならば、一九一一年生れのラティガンの引承いでいる流れは、又一方の、カワード、モーム、プリーストリと云つた人達のそれであろう。

（田中弥一郎）